蒼の天使は、チョコにまみれ…

神薙慚愧

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
蒼の天使は、チョコにまみれ…

【Ｎコード】
Ｎ０１７９Ｒ

【作者名】
神薙慚愧

【あらすじ】
鳳炎学校
傭兵を養育するその学校は一味違う
バレンタインデー
乙女が思いを伝える日
しかしこの学校は違う
恋は戦争
嫉妬は業火
様々な思いが交差するのだった。

（前書き）

バレンタインデーには間に合わなかったけど一種のどたばた劇としてお楽しみください。

一発書きなので色々とグダグダだけど見逃してください。

２月１４日　１１時２８分　鳳炎傭兵学校３Ｆ廊下

「そっちはどうだ？」
「駄目だ、回り込まれている」
「……万事休す…」
今日はバレンタインデー
年に一度の女子にとってのラブイベント
男子にとっては、勝ち組か負け犬かを決める審判の日
俺は、月詠雷輝、この傭兵学校の高等部に所属する生徒である。
今はというと、突如開始したイベントにより、女子からは求愛を、男子からは、怨念を受けながらその両方から俺の友達の、猿飛烈火と神裂隼人と共に逃げている最中である。
つまり三対全校生徒の鬼ごっこというわけだ。
どうしてこうなったのかは、数時間前に遡る。

朝　８時２４分　月詠宅
「……俺は今日学校休む」
朝、いつもならおはようのあいさつをしてくるはずのそのタイミングに神裂は突然そんなことを言った。
「ダメだろズル休みしちゃ」
俺は即答で、ダメ出しした。
「今日は一年の中でひときわ恋の炎が激しくなる日、そして負けた男子たちの悔しい顔を楽しめる日だぜ」
「……そういうお前も負け組だよな？」
「いいもん…ネット上のみんなと一緒に黒ミサでも開くもん…」
ネット上のみんなと一緒に、嫉妬の炎に包まれながら
みんな死ねばいいのに～♪

と合唱するのが毎年恒例行事である。
「……とにかく、俺は行きたくはない」
なぜ、そこまでして休みたがるのだ？
男子は何があろうと絶対に出席する日なのに…
「あーうーお兄ちゃん…おはよう…」
そこへ水城が起きてきた。
あれなんだか顔が赤いぞ？
「おう水城、おはよう。なんだか顔が赤いぞ？大丈夫か？」
「うん…大丈夫だよ？」
声がか細いな。大丈夫そうには見えない。

ドスン
バタン
ガスン

ついでに、毎日恒例の妹の火憐のダイナミック起床
今日はいつもより多目に襖を巻き込んでおります。
「兄ちゃん、おはよー」
「おはよう…今日は目覚めがいいのだな」
いつもなら寝ぼけ眼の状態なのだが…
「いやー夜中まで今日の聖戦の準備していてさぁはっきり言って寝不足なのよねー」
「とりあえずひっくり返った状態で話すな。」
火憐から襖を取り外して会話に戻る。
「妹たちよ、好きな男の子でも渡すのかね？」
「なに兄ちゃん…神妙な顔つきで聞いてくるの？まぁ友チョコだよ。私に彼氏ができるはずがないって」
「……自分で言ってて悲しくないのか？」
「だよな～火憐に彼氏ができるはずが…いや待てよ。んなばかなはずがあるか。こんなバカカッコいい子の美貌に気づかないとは…」

「兄ちゃん、バカはともかくカッコいいってなんなんだ。私はそこまでじゃあないよ」
「……謙遜は立派だが、バカってことは認めるのだな」
「渡す相手はともかく確か火憐は料理出来なかったよな？水城と一緒に作ったのか？」
「えっとそうなんだけど、その水城はどこいった？」
「水城はそこに…ってうわ！？本当に大丈夫か！？」
振り返るとそこにはふらふらとした足取りで立っていた。
風邪でもひいたか？
水城に歩みよりおでこをあわせて体温を計ってやる。
「わわっ！？」
水城があわてて退く
なんかしたか？
露骨な拒否反応されるとお兄ちゃんショックです。
じゃなくて…
「水城、風邪ひいたか？熱があるぞ」
「うん…ちょっとぼーっとする」
「今日は休め、な？」
「うんそうする…」
テコテコと自分の部屋へと戻っていった。
「……というわけで俺も…」
「ただしテメーは駄目だ」
部屋へ逃げようとする隼人を取っ捕まえ火憐たちより先に登校する。

９時１５分　鳳炎傭兵学校１－Ｓ教室
「おはよー」
「ウイーッス」
隼人を引き摺りようやく自分の教室までたどり着いた。
遅刻ギリギリだぜまったく
やや疲れぎみの俺を出迎えたのは、友達の猿飛烈火と風見咲希だっ

た。
「今日はやけに遅かったな？」
「隼人がね、今日は行きたくないって駄々こねてさあ」
「……駄々こねてないのだが…」
「ふふふ、まぁ今日は希望のない人にとってはあまり来たくない日だからねぇ」
咲希が含み笑いをする。
こういう笑いかたをするときって大抵何かたくらんでいるんだよな。
「まぁ今日も一日平和に過ごせますようにっと」
「……そうだといいけどな」

数十分前　咲希視点
「咲希さま、今日はビシッと決めてきたのですがどうでしょうか？」
「この包装大丈夫でしょうか？」
「あの…とりあえず様づけはやめてよね？同級生なんだし…ね？」
「そうは言わずに咲希さま、あなた様がいないとあの方の情報を提供してくださる方がいなくなってしまうのです」
今日はバレンタインデー
全国の乙女たちが勇気を振り絞って好きな男の子に愛を伝える日なのである。
私は、なかなか告白や思いを伝えられない乙女たちを応援するため同居させてもらっている、烈火を置いて先に登校していた。
校門までもうちょいというところで恋する乙女たちに囲まれ先ほどのような質問責めにあい今に至る。
「私、あの高級チョコを買って来たのですが大丈夫でしょうか」
「えぇ！？あそこのチョコ！？私手作りだよぉ」
「私も～愛の液たっぷり注いだんだからね～」
「ミキちゃんいやらしい～」
何の話だ？愛の液って？
媚薬でも入れたか？

もらう人はご冥福でも祈っておこう
といっても、思い当たるのは一人だけだけどね。
神裂隼人
彼女らが狙う相手である。
彼は女子たちの間では、難攻不落とも言われるほど、恋愛に関しては鈍くこの前もラブレターを彼の下駄箱に入れて呼び出したはいいものの、果たし状と間違えたのか（どこをどう見たらあのラブリーな手紙を果たし状と間違えるのだろう…）フル装備でやって来て、あまつさえ「付き合ってください」と告白まで言えたが（よくがんばった）彼は買い物に付き合うみたいな類いと勘違い
彼女は心折れ撃沈した。
なんとしてでも彼の心を射止めようと攻略部隊を結成（ファンクラブと大して変わらない）彼に関する情報を集めている。
私も彼に最も近い女子ということで彼女らにアドバイスを送っている。
昨日の夜もチャットで会議をしていた。

２月１３日　乙女たちの会議

チャットルームには誰もいません
チャットルームには誰もいません

迅狼さんが入室されました。
迅狼【ヤッホー】
迅狼【おやおや、まだみんな来てないようですね】
迅狼【困ったな、みんなが来るまで何してよう】

あやぽんさんが入室されました。

あやぽん@スコールは私の婿【こんばんはーです。】

あやぽん@スコールは私の婿【あれあれまだ皆さん来てないようですね】
迅狼【……ゲームしていたの？】
あやぽん@副部長【あややや、失礼しましたー、会議の時間までシルキーさんとＦＦで対戦していたもので…】
迅狼@咲希【まぁいいけど…】

紗那さんが入室されました。

紗那@モンハン・双剣主体【にゃははー】
紗那@モンハン・双剣主体【どうもッす】
紗那@モンハン・双剣主体【まだ三人のようですね～】
紗那@モンハン・双剣主体【先に会議始めます？】
迅狼@咲希【そっちは一狩りしてきたのね…】
紗那@電マ探し中【あわわ失礼しましたー】
あやぽん@副部長【……なに探しているの？】
紗那@見つかった～【電撃マ王だよ？】
迅狼@咲希【間際らしいのよあなたは…】
紗那@参謀【……？】

シルキーさんが入室されました。

シルキー@ティーダは私の太陽【どうもこんにちは】
シルキー@ティーダは私の太陽【よろしくお願いいたします。】
迅狼@咲希【あなたは試合でもしてきたのね…】
シルキー@部長【失礼しました！！】
迅狼@咲希【まぁいいけど…】
迅狼@咲希【これで全員なの？】
あやぽん@副部長【まだあと一人来ていないです。】

ビリリンさんが入室されました。

ビリリン@一仕事してきたよ【皆の者遅れてすまぬ】
迅狼@咲希【これで皆揃ったようね？】
あやぽん@副部長【一仕事って何してきたの？】
ビリリン@広報員【うむ、よくぞ聞いた】
ビリリン@広報員【実はこのチャットルーム、今日だけラジオ番組みたいに皆さんに見れるようにしているのだ！】
シルキー@部長【うわーすごいです】
紗那@参謀【ってことはさっきの恥ずかしーやりとりも？】
ビリリン@広報員【大丈夫、大丈夫いまからスタートだから】
あやぽん@副部長【良かったー】
シルキー@部長【時間もおしているので始めましょう】
迅狼@咲希【じゃあ始めましょうか】

・・・・・

こうして数時間にもおよぶ大激論が繰り広げられ明日の聖戦に備えた。

だかしかし……

2月14日　校門前
「あれって…」
「持ち物検査？」
そうプライバシーもへったくれもない持ち物検査が行われていたのだ。

没収の対象に皆の愛のこもったチョコが含まれていた。
検査を行っていたのは、風紀委員の委員長と生徒会長（両方女子）
それと、教師陣の中では最強の佐々木先生
チョコを没収されただけに女子たちは抗議の声が上がるが、この面子の前では子猫の鳴き声と同じだった。
「私たちの戦が……」
次々とチョコを没収されていく女子たち
クーデターでも起きそうだ…

教室　朝のＨＲ　雷輝視点
「ＨＲ始めますヨー」
間延びした担任の声とともにＨＲが始まる。
俺のクラスの担任は、教師陣の中で最強の佐々木小十郎先生である。
物干し竿、という銘の大太刀を使うおネエ系の先生である。
「……佐々木、今日は帰っていいか？」
「今日は大事な日なんだからだ～メ」
佐々木先生と隼人とはすこぶる仲が悪い
故に、しょっちゅう喧嘩する。
だか今日は、戦意はないのか喧嘩は起きないようだ。
「さて今日の連絡は―」
ピーンポーン、パーンポーン…
『あーあーマイクテスト…マイクテスト…よし大丈夫みたいだね』
突然教室のスピーカーから校内放送が流れ出す。
なんだ…
『えー学校長からの話だ。よーく話を聞いておけよ？』
うわ、またなにかやらかす気だ…
ここの校長はとにかくイベント好きであり、ことあるごとにイベントを企画し実行している。
どれも楽しいから不平はないんだけど…
『女子ども！チョコを没収されて悲しいか！？』

女子たちからブーイングが巻き起こる。
『男子ども！チョコを貰いたいか！？』
うおー！！と男子たちから歓声が上がる。
ただし、俺と隼人、烈火は除く
俺ら甘いの苦手なんです実は…
『今日は、バレンタインデーだ。愛を伝えるチャンスの日、ということで今日の授業は中止！』
へ…？
『その代わり女子は誰か一人にチョコを渡し男子は誰か一人にチョコをもらえ！受け取れなかったり渡せなかった奴はあとできつーい補習があるからな』
あれ？でもチョコって朝没収されてなかったっけ？
すると女子たちの机に、綺麗にラッピングされたチョコたちが現れた。
『朝没収したチョコには先ほどのルールの不正を防ぐためセンサーを取り付けておいた。では思う存分恋の炎を燃やしまくれ！！』
そういって校内放送は終わった。
暫しの沈黙
そして…
「隼人さま！」「雷輝お兄ちゃん」「烈火さん」

「「「私の愛を受け取ってください！！」」」
雪崩のように女子たちがやって来た。
チョコを渡す対象はどうやら、隼人と烈火と俺のようだ…って俺！？
「いったいどうなってやがんだ…っていねえ！？」
説明を求めようと隼人の方を向くがすでにいなかった。
烈火の方を向くも同じく。
「置いていかれた！？」
この量の女子なんて相手に出来ないぞ！？
いくら、猫耳、メイド、巫女さん、ヤンデレ、ツンデレ、眼鏡っ娘、

ツンドラ、合法ロリなどなどの属性の女子がいるからって俺には無理だ！！
ハーレムは5人までって相場が決まってんだよ！
俺は教室の窓ガラスを割って外へと逃げた。

聖戦開始　咲希視点
開始の声と同時に全クラスの女子たちが一気に駆け込んできた。
いやアドバイスした私ですらびっくりだわ
いくらモテる男トップ3がいるからってねぇ…
一言言いたい

どうしてこうなった

2月13日　乙女たちの会議
紗那@参謀【今年の渡す相手ランキングですが…一位から、神殺、雷霆、炎獅子の順です。】
迅狼@咲希【わざわざ二つ名で報告せんでも…】
迅狼@咲希【えっと…隼人はともかく…なんで雷輝と烈火？】
紗那@参謀【雷輝さんは、ムードメーカーだから、烈火さんは日頃優しくしてもらっているお礼だそうです】
迅狼@咲希【へぇ～やるねぇ】
あやぽん@副部長【咲希さんのチームのメンバーでうらやましい～】
シルキー@部長【では、咲希さん、対策のアドバイスをお願いいたします】
迅狼@咲希【あいよ、えっとね…隼人はもう鈍感すぎるから、私が愛しているんだってことをわからせなきゃダメ】
紗那@参謀【つまり猛烈に攻めなきゃダメと】
迅狼@咲希【雷輝は…好みが妹属性だからね「お兄ちゃん」とでも言ってやれば気を引くことができるだろうよ】

ビリリン@広報員【雷輝さんはシスコン…と】
迅狼@咲希【その解釈はおかしい…】
迅狼@咲希【烈火は…刺激を与えすぎないようにね。彼、女の子に対する免疫がないほうだから】
シルキー@部長【烈火さまは過敏症と】
迅狼@咲希【だからその解釈はおかしいって】

廊下　１１時５８分　男どものブリーフィング
「逃げ続けて早二時間…もう限界…」
迫り来る女子の群れ
世の中には、ハーレムになりたいなんて思っているやつもいるがやめておいた方がいい。
追いかけられてわかったのだが、恋する乙女の目は、ありゃ獲物を狙う鷹の目だ。
曲がり角を曲がって直ぐ様カモフラージュに、段ボールを三人でかぶる。
荷物のフリでやり過ごすしかない
「段ボールでカモフラージュしているかぎり大丈夫だ」
「本当に大丈夫なのか雷輝？」
「……だから今日行くのは嫌だったのだ…」
「隼人が嫌がっていた理由がようやくわかった」
なるほど、争乱になるとわかって嫌がっていたのか。
「でも、隼人はとにかくなんで俺と雷輝もターゲットに入っているんだ？」
「さぁ？」
隼人は、ともかく俺たちはなんでだ？
しかも俺たちのストライクゾーンを知ってんだ！？
「……さて、軍師よ。この戦局どう切り抜ける？」
隼人が話を切り出してくる。
「嫉妬にかられた男子どもをどう諌めるかが問題だ。男子どもを味

方につけて女子に当たらせば、戦局はぐっと有利になる」
この学校の男子嫉妬深いんだよね。
「……その役目は俺が引き受けよう」
「戦闘になる可能性が高い。集団戦闘は隼人に任せよう」
「俺は？」
「俺と烈火で、体育館に陽動。」
「それからは？」
「まぁ、俺が何とかする」
俺には策がある。
うまくいく、絶対に
「いたわよ！？」
「ちっ見つかったか…」
「……めんどくさい」
「オペレーション、スタート！」

１３時１９分　廊下

前言撤回
私リタイア寸前です。
「お兄ちゃ～ん」
なぜじゃー！？
俺を追いかけるように、追ってくる女の子たち
なんなんですか一体！？
囮になったのはいいが、くそっなぜ愛され役なんだ！？
お兄ちゃん、お兄ちゃんって連呼すんな！
理性が飛びそうだ。
くそっ…お兄ちゃんって呼ぶな！
「うるさーい！！」
急ブレーキをかけ女子の群れの方を向く。

女子の群れも止まり相対する形となる。
「さっきからお兄ちゃん、お兄ちゃんと…」
これだけは言わせてもらう

「お兄ちゃんと呼んでいいのは愛する妹だけだあああ！」

拝啓、父さん、母さん
もうお婿に行けないかも

１３時２０分　教室　咲希視点

「伝令です、先ほど月詠雷輝を捕えました。」
「そう…御愁傷様…」
私は、この祭りが始まってからずっと女の子たちを指揮している。
男子たちも暴れているようだが、いかがなものか…
あれ？というかこれ戦争ものじゃなくね？
「伝令です！…突然、男子たちの反応が消えました！」
あわてて教室に入ってくる女子Ａ
「反応が消えた…？」
「詳細は不明、いつの間にかいなくなっていたようです」
「私たちに喧嘩売ってくるってことはないだろうけど、一応警戒しておいて」
「了解しました」
そう言って教室をあとにしていく
それにしても、男子たちの姿が消えただなんて…
まさかね…
というか、なんで私指揮官の真似事なんてしているのかしら…

１３時２０分　月詠宅

とある一室
そこは、どこかの西洋のお姫様の部屋のようである。
「はっ！…今、お兄ちゃんの身の貞操に危機が来た気がする。」
突然水城は、そこにあるお姫様ベッドからガバッと飛び起きる。
「うおっ！？いきなり起きるなよ」
「ゴメン、ゴメン」
「病人は大人しく寝てなって」
火煉は起き上がった水城を無理やり寝かせてやる。
火煉は今日は学校を休んで水城の看病に徹している。
普段はアホキャラの火煉だがこの時ばかりは、家庭的スキルを発揮している。
「ぶー　ところであれ大丈夫？」
「まったく…あれ作るから風邪引くんだよ…」
まったくあんなものを作るから…

１３時３０分　体育館

「なぁいくらなんでもやりすぎじゃね？」
「……生憎、集団戦だと手加減できなくてな」
「奪刀術の進化形『多刀流』ねぇ…個人戦より集団戦のほうが強くなるねぇ…」
無事…いや計画どおり男子どもを体育館に集めることに成功した。
再起不能にさせる必要はあったのだろうか？
「……あとは雷輝が来るだけだが…」
「速報、雷輝一抜け」
そのセリフに今までくたばっていた男子どもがゾンビのように起き上がってきた！！

「月詠…雷輝…許すまじ…」
「うわぁ…これはなんだ？一種のホラー映画か？」
ズルズルと這い上がってくるあたりいかにもゾンビらしい。
こっち見んな
「……はぁ…仕方ない」
隼人はため息をつき、ばんっと床を蹴る。
その音に男どもはビクッと背筋をのばす
「……おいお前ら！モテたいか！？」
「は…？」
意外なセリフに一同は暫し沈黙するが、直後に、うおおおお！！と雄叫びが上がる。
「女の子にチョコ貰いたいか！？」
うおおおお！！
「好きな女の子はいるか！？」
そのセリフにまた沈黙が漂うが直ぐ様雄叫びが上がる。
「じゃあ言ってやる、なぜお前らがモテないかをな！！ズバリお前らは人間として中身が乏しいんだよ。人は外面じゃない、中身なんだよ！！わかるか！？俺は好きになった少女を不幸にさせた外道だ！だがお前らには幸せにさせられる力がある！お前らの優しさで好きな女の子を振り向かせろ！こんなとこで足踏みなんかしてないで、自分の思いを伝えてこいバカどもが！！」
いつの間にか、男たちは隼人のセリフに涙していた。
「そうだよ…神裂のいうとおりだよ」
「俺、今からコクってくる！！」
「あっ貴様、抜け駆けは許さんぞ！」
バタバタと体育館をあとにして行った。

「行っちまったな…
「……あぁ」

「そして隼人…ご苦労様」
「……とりあえず一件落着だ」
「いや待て、チョコ貰わないと罰ゲームだろ。俺はともかくお前はどうするんだ？」
「……あのな、俺実は…
カカオアレルギーなんだよ…」
「……災難なやつだな…」

１３時４２分　教室　咲希視点

「伝令！男子どもが一斉蜂起、猛烈な告白攻撃を受けています！」
「……あはははは…」
これをまさにラブハリケーンとでもいうのだろうか。
今起こっている、出来事にただ笑うしかなかった。
「一応聞いておくけど告白を受けた娘は？」
「大多数がウブなため次々と陥落しています」「まぁ、幸せな結果になったからいいか」

１６時００分　校庭
『これにてバレンタインイベントは終了です。渡せなかったり、貰えなかった生徒はこのあと直ぐ様補修となりますので、至急校庭に集まりなさい。なお逃げた場合はお仕置きが待っていますので…』
結局、隼人は誰からも貰わずに、補習を受けることとなった。
といっても、男子たちが攻勢に出てカップルが大量に出来たためもらえるチョコがなくなったというのが正直なところだ。
「……で補習の担当の先生がなんで校長なんだ」
「あらら、今年の哀れな子は神裂君だけとは、意外だね」

「……自ら進んで辞退していたんだ。文句あるか？」
「うーん、例年どおり私からの猛烈な愛を受けてもらう予定だったんだけど…」
「……断る」
「即答！？ひどい、ひどいよ！」
「……黙れこのロリババア。形だけの愛なんぞいらん！」
「ぐすっ、例年みんな私のこと可愛がってくれるのに…」
校庭のど真ん中でぼろぼろと涙を流し出す校長
その様子を学校の校舎から見ていた全校生徒は
「あー！よくも僕らのアイドルを泣かせたな！」
「その行為万死に値する」
一斉蜂起
疾風の如く隼人めがけて攻撃してきた。
「……なんでこんなとき無駄な結束力を発揮するのかねぇ…」
はぁ…とため息をついてから迎え撃つため前へ突撃した。

１６時１２分　雷輝視点

「ひ、ひどい目にあった…」
女子たちに捕まってからはもみくちゃにされ精神的にまいってしまった。
体力も限界なため先に帰らせてもらった。
家につきドアを開ける。
その先にあったのは、等身大の妹の水樹を象ったチョコの像だった。
しかも私を食べてくださいと言いたそうなポーズである。
雷輝は目の前が真っ暗になった。
「お兄ちゃ～んおかえり～、どう私のチョコ？ってお兄ちゃん？お兄ちゃ～ん！？」
あぁやっぱり妹が一番お兄ちゃんと言うのがふさわしい

そんなことを思いつつ床に倒れた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0179r/

蒼の天使は、チョコにまみれ…

2011年10月7日18時55分発行